

貴方に、昔々の舟の話をしよう。

それは、人がまだ空を飛ぶ術を知らず、舟が世界を渡るための大切な乗り物だったころのこと。

ある村に金の舟と讃えられるほどすばらしい舟をつくる船大工の男がいた。

彼の無骨な手が削り出し組み立てる木はどこまでも強く滑らかで、彼が糸からよって縫いあげる帆は、どこまでも風をきって進むことができた。

やがて年老いて手もこわばり、ついに仕事を辞めねばならなくなったとき、船大工の男は最後に三艘の舟をつくった。そして三人の息子たちを呼び寄せ、こう告げた。

「わしはずいぶん年老いた。これまで数え切れぬ舟をつくってきたが、自分が舟に乗り世界を見ることは、すっかり忘れていた。かわりにお前たちにこの舟をやろう。これに乗って旅に出なさい。

そして、この世で最も尊いと思うものを、私に持ちかえて来ておくれ」

船大工が見送る港から、息子たちはそれぞれに旅立っていった。

そして三年後。一番上の息子が戻ってきた。舟は色とりどりの光に包まれ、まぶしいほどに輝いていた。一番上の息子は誇らしさで胸をいっばいにして、父親の前に進み出た。

「父上、お喜びください。私は伝説の宝島を見つけ、この世で最も美しい宝石を手に入れました」

父親は微笑んで、一番目の息子を迎えた。

続いて、二番目の息子が帰ってきた。舟には、南の海に棲むという人魚の娘が乗っていた。

「父上、お喜びください。これは水晶の歌声をもつ人魚です。その音色はどんな宝石よりも透明で、心身を若返らせ長寿をもたらすといひます」

父親は微笑んで、二番目の息子を迎えた。

これらのうわさを風が運び、村人たちが集まってきた。

「さすが、船大工の金の舟だ。末息子もきっと、すごいものを持ってくるにちがいない」

人々は二人の息子が積んできた宝物を見ては、ささやき合った。

やがて日が暮れ水平線から星々がわきだす頃、ついに一番末の息子が戻ってきた。

しかし驚いたことに、末息子の舟は空っぽだった。村人たちは野次を飛ばし兄弟たちは嘲笑った。

これを聞いた船大工は、水の上をすべるように舟に近寄り、言った。

「私の愛しい息子よ、お前はいったい何を持ち帰ってくれたのかね？」

末の息子は父親の前にひざまづくと、りんごのように顔を輝かせて言った。

「ああ父上！どうぞお喜びください。私は、この世界のすべてを。すべての物語を連れて帰って参りました。この海には羅針盤も地図も持たず、星を読みながら航海する民がおります。その術を学びあらゆる島をたずね、彼らの物語を心に留めてきました。私たちとはちがう神々の物語。星々と海についての伝説。彼らがどのように漁をし、畑を耕し、暮らしているかということも。海や星とつながるための歌もです。私は父上に世界を語るができます」

末息子は、誰も知らない響きの言葉で、人魚と語り、歌いはじめた。

「これは、星のない夜にも迷わず進むための歌。私は千の歌、千の物語を父上にきかせましょう」

船大工は大きく微笑んで息子を抱きしめた。

—これはずっとずっと昔の物語。そして、今これからはじまる物語—